
仮面ライダークウガ サムズアップ = アゲイン

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

仮面ライダークウガ サムズアップ＝アゲイン

【Nコード】

N4734B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

グロンギとの戦いは終わった。だが一條薫はまた警視庁に転勤を命じられる。そして五代雄介は二人の謎の者達と出会う。運命の輪が回ろうとしていた。仮面ライダークウガの最終回のお話です。他のシリーズともリンクさせています。

第一章

仮面ライダークウガ サムズアップ＝ア
ゲイン

未確認生命体グロンギとの戦いが終わって暫く経っていた。一条薫はその功績により警視に昇進し今は長野県警に勤務していた。だがそんな彼に声がかかったのである。それも警視庁からだ。「警視庁からですか」

一条は上司である今いる長野県警特捜部部長の話聞いて彼に顔を向けていた。今彼はその特捜部の部屋にいる。これといって愛想のないその事務的な部屋の中で警察の制服の上司と向かい合っていたのである。

彼はスーツにコートであった。これはかつてグロンギと戦っていた頃から変わらない服装である。その服装で今も長野県警で勤務しているのである。

「そうなんだよ」

やや太って丸顔の部長がそれに答えてきた。

「転勤ということだね」

「転勤」

その言葉を聞いた一条の目が光った。

「転勤ですか」

「うん」

部長は真剣な顔で答えてきた。「冗談を言っている顔ではなかった。

「その通りだ。よいかね」

「ええ。ですが」

彼はここでどうしても聞きたいことがあった。それで問うた。

「グロンギはもう一人もいなくなった筈ですね」

「それはな」

部長もそれは認めてきた。どうやらそのうえで話であるらしい。

「私も確認している。間違いはない」

「では一体」

「普通の転勤だとは考えないかね、やはり」

「ええ」

普通ならそう考えるべきであった。だが彼はそれを直感で感じていたのだ。そうではないと。だから今部長の言葉に対しても何かを感じていたのである。その何かがまた彼を大きなうねりの中に引き込んでいくこともまた察していたのであった。

「何かありますね」

「私は詳しいことは聞いてはいない」

部長はまずはそう断ってきた。

「しかしだ」

「しかし………ですか」

「そうだ。間違いなく何かがある」

彼はそれを今はつきりと述べてきた。

「詳しいことは東京で聞いてくれ。だが」

「ええ、わかっています」

一条も真摯な顔で頷いた。直感はまだ確信に変わっていた。

「また。戦います」

「うん、頼むぞ」

こうして彼は東京に向かうことになった。そしてまた一人の戦士も運命に導かれることとなっていたのである。

第二章

そのもう一人の戦士五代雄介は日本から遠く離れた異郷の地で一人草原に寝転がっていた。そこで一人うとうとと眠りについていたのである。

「君が五代雄介君ね」

そこにふと声をかける者がいた。明るい女の声であった。

「日本語？」

「そうよ。いいかしら」

その言葉を受けて閉じかけていた目を開ける。するとそこには小柄で青いやけに目立つ服を着たショートカットのアジア系の女が立っていた。

「君は？」

「実は貴女に用があつて来たの」

「俺に」

「ええ」

彼女はにこりと笑って答えてきた。無邪気な様子を装っているがそれが芝居であるのはその隙のない動きでわかる。五代はグロンギとの死闘でそれを察するまでになっていたのである。

「会いたい人がいて」

「君じゃないのかい？」

「ええ。この人」

後ろを指差すともうそこに一人の青年が立っていた。漆黒の服に身を包み女と見間違うばかりの美貌をその顔にたたえていた。

「はじめまして」

彼は五代が起き上がるよりも先に声をかけてきた。そのうえでにこりと笑ってきた。

「五代雄介さんですね」

「ええ」

五代は起き上がりながらそれに応えてきた。構えは取らないが無意識のうちに彼を見て警戒していた。

彼からは何か得体の知れないものを感じていた。そしてその隣にいる女からも。それは彼がンダグバ、ゼバとの戦いにおいて感じたものと同じであった。人を超越した存在の醸し出す圧倒的な存在感と力を感じさせていたのである。

「実は貴方にお渡ししたいものがありました」

「それは何ですか？」

「以前貴方が使っていたものです」

彼は五代を見たまま述べてきた。その目も全く動いてはいなかった。じつと五代を見ている。

「俺が。まさか」

「はい、その通りです」

青年は答えてきた。

「おわかりですね」

「しかし俺は」

五代は顔を背けてきた。

「グロンギを倒した。もうこれ以上は」

「それはわかっています」

青年は言ってきた。

「ですからこそ」

「なら何故」

「五代雄介、いえクウガよ」

青年は今彼をクウガと呼んだ。

「貴方はかつてそのグロンギと戦われました。人々を守る為に」

「はい」

その言葉には応える。

「そしてまた。人々を守る為に貴方の力が必要なのです」

「またグロンギが」

「いえ」

青年はその言葉には首を横に振った。そうではないというのだ。
「グロンギは確かに滅びました。ンニダグバニゼバもまた」
「なら何故」

ンニダグバニゼバとの死闘は今でも覚えている。その中でアマダムを破壊されている。彼はもうクウガにはなれない筈なのである。
「グロンギだけではないって考えたらいいんじゃないの？」

ここで青い服の女が言ってきた。

「グロンギだけじゃない」

「そう。ほら、グロンギってどう出て来たかわかってないわよね、結局」

「そういえば」

その通りである。グロンギはその発祥も詳細な歴史も文化もわかっていないのだ。そうした意味でまだ多くの謎が残っているのである。

「グロンギを作った存在がいるのです」

青年はまた述べた。

「その存在は人を害しようとしています。その存在がまた」

「グロンギは作られた存在。そしてそれを作った者が出て来ようとしている」

「そうです。だから私達は貴方の前に現われたのです」

「俺に人々を守る為に戦う為に」

「またクウガとして」

彼は言った。

「よいでしょうか、クウガよ」

「しかし俺はもうクウガには」

変身できない。それを言おうとする。だが青年は微笑みを浮かべて五代の腹に手をかざしてきた。そしてその手から白い輝かしい光を放ったのであった。

「なっ……」

「感じるでしょう、力を」

青年は光を放ちながら彼に語り掛ける。

「力がみなぎるのが。そして」

「クウガに」

「そうです。日本です」

彼は光を放ち終え手を元に戻して言う。

「日本に戻るのです。そしてまた」

「戦いに」

「貴方が戦いたくないのはわかってるわ。けれどね」

「俺でなければ」

「そういうこと。悪いけれど我慢してね、そこは」

女は明るい言葉だったが少し真剣な響きをその声に持たせていた。

「世の中の人達の為に」

「わかりました」

五代は真摯な顔で頷いた。

第三章

「なら今から」

「はい、貴方だけではありませんから」

「俺だけじゃない」

「そうです」

青年はまた語った。

「貴方だけではないのです。戦うべき戦士は」

「じゃあ一条さんも」

「はい、彼もまた」

「けれどあの人だけじゃないのよ」

「という」と

今度は女に対して顔を向けた。見れば思わせぶりに笑っている。

「いい？」

「ええ」

女は五代の返事を受けてからまた語りはじめた。それは彼にとっ
ては驚くべきことであった。

「戦う人は貴方と一条さんだけじゃないの。変身する人もね」

「俺以外にも」

「そういうこと。一杯いるから」

「敵は強大です。グロンギよりも」

「グロンギよりも」

五代はその言葉に唾を飲み込んだ。かつて幾度も死闘を繰り返した
彼等以上というのが信じられなかったからだ。

だが嘘を言っているとも思えなかった。女の口調は軽いものではあ
ったがそれでも嘘は感じられなかったのだ。それは五代の勘ではす
ぐにわかるものであった。

「そうよ。すつごく強いから」

「おそらく貴方は幾度も危機に陥るでしょう」

青年もそれを言う。

「ですが貴方でなければ駄目なのです。だからこそ
俺でなければ」

「そうです。だからこそ再びクウガの力を」

「わかりました」

そこまで聞いて遂に笑顔になった。

「俺はまた戦います。皆の笑顔を守る為に」

「そうですね。皆の笑顔を守る為に」

「頑張つてね」

「ええ！」

サムズアップをした。青年も女も。こうして五代はまた戦いに赴く決意を固め日本へ戻ったのであった。

一条は東京へ戻っていた。そこにはかつてのスタッフ達もいてま
ずは彼等との再会を楽しんだ。

「戻って来たんですね、一条さん」

ポレポレに行くと五代の妹である五代みのりがいた。他の皆も。

「何かこの前会ったばかりみたいですよ」

「そうだな」

一条は龜山に顔を向けて笑った。懐かしい顔触れがそこに集まっ
ていた。

「何かここに来たのが昨日みたいだ。本当に」

「そういえば一条さん」

みのりが彼に声をかけてきた。

「どうしたんだい？」

「お兄ちゃんから連絡がありました」

「あいつからかい」

「はい。何でも日本に戻るそうで」

「そうか」

その言葉を聞いた一条の目が光った。強い光になっていた。

「やっぱりな」

「？何かあるのかい？」

それを聞いた椿が彼に問うてきた。

「いや、戻って来ると思っていたから」

彼はこう答えた。そしてまた言う。

「また戦いになる」

「ああ」

おやっさんがそれに応えた。

「だろうな。御前さんが戻って来たのとあいつが戻るって話を聞いてそう思ったよ」

「そうですね」

「グロンギはもういなくなったがな」

「ええ」

「また新たな敵か。どうしてこう」

感情を入り混ぜた声を述べてから彼に顔を戻した。

第四章

「だがな。頑張ってくれ」

「こう声をかけた。」

「皆の為にな」

「はい」

にこりとして頷いた。それからすぐにポレポレを後にしようとする。そんな彼に奈々が声をかけてきた。

「何処へ行くんですか？」

「うん、ちよつと」

そう答えただけだった。深くは言おうとしない。

「すぐ戻るから」

「そうですか」

「一人じゃないだろ」

そんな彼におやっさんが声をかけてきた。

「戻って来る時は」

「ですね」

自分でもそう返す。予感があつたのだ。

「じゃあ」

「ああ、コーヒーは二つだな」

「クリームも」

そう言い残してポレポレを後にした。そのまま一人コートをたなびかせ歩いていく。

一人で道を歩いていくと前から青年がやって来た。彼こそは。

「久し振りだな」

「はい」

二人は向かい合つてにこりと微笑み合った。

五代は変わっていないかった。一条も。二人の戦士が今再会したのであった。

「また、戻って来ました」

「来ると思っていたよ」

一条が五代にそう返した。

「今度の相手はかなり手強いらしいですが」

「だからこそ御前がいるんだな」

「ええ」

五代は一条の言葉に答えた。

「皆の笑顔を守る為に」

「そうだな、その為に」

一条もその言葉に頷く。それからまた述べた。

「また戦おう、いいな」

「はい！」

二人は今戦士の挨拶を交わした。それは。

サムズアップであった。爽やかな笑顔でそれを同時に出し合ったのであった。

「行くか」

その後で一条は言ってきた。

「皆が待っているぞ」

「ポレポレですね」

「そうだ。そこでな」

「おやつさんのコーヒーがまた飲めるとは思いませんでしたよ」

「俺はまた飲めたらいいなと思っていたよ」

二人はその爽やかな笑顔で言葉を続ける。

「御前とな」

「一条さん……」

「バイクで来たのか？」

「いえ」

その問いには首を横に振った。

「歩いてです。バイクは駅に置いてきたんで」

「そうか。じゃあ一緒にな」

仮面ライダークウガ サムズアップ=アゲイン

「ええ」
二人はそのままポレポレに向かう。新たな戦いの前に今その絆を確かめ合っていた。五代は再びクウガとなるのであった。皆の笑顔を守る為に。

仮面ライダークウガ サムズアップアゲイン 完

2007・1・14

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4734b/>

仮面ライダークウガ サムズアップ=アゲイン

2008年11月7日08時09分発行